

私の街と水辺

(公財) リバーフロント研究所 代表理事 竹村公太郎



私は太平洋戦争が終わった昭和20年に生まれ、横浜の下町で育ちました。荒廃した横浜を流れていたのが大岡川でした。その大岡川は、とても綺麗な色で流れていました。ドス黒い水の上を、赤や紫や緑の色が筋を付けて流れていたのです。それは捺染(なっせん)工場の廃液でした。

色が付いているので、流れの微妙な変化の様子が良く見えます。小学生だった私は、橋の上からその動きをいつまでも見続けていました。まさか、河川技術者になるとは夢にも思いませんでしたが、川の流れの観測の最初の体験だったのです。

中学生時代、伊勢佐木町の本屋の有隣堂へ行った時、大岡川で人が集まっていた。何だろうと人混みをかき分けて前に出ると、男性の死体が浮かんでいました。このような泥の川の光景が、私の川の原因風景です。

大学は横浜を離れ仙台に行きました。市内を流れる広瀬川を橋の上からのぞくと、川底まで見通せることに驚きました。

大学を卒業して最初の職場が鬼怒川の川治ダム工事事務所で、宿舎は今市市の大谷川の畔でした。大谷川はどう見ても川とは呼べませんでした。川原一面、大きな石がゴロゴロと転がっていて、水はその石の間を隠れるように流れていました。日光の山々から押し出してきた土石流が、ここで扇状地を形成していたのです。26歳の私はここで家庭を持ち、長男を授かり、この大谷川の河原を散歩をしました。

4年後、東京に転勤になり千葉県松戸に住むことになりました。当時、松戸に娯楽は何もなく、江戸川が流れているだけでした。休日にはフーテンの寅さんのように土手を風に吹かれ散歩をしたり、段ボールで堤防を滑る息子の横で寝ころんでいました。

2年後、会津若松市の大川ダムへの転勤となり、湯川という小さな川の畔に住みました。地元の人々のまねをして魚をすくう竹製の漁具を買い、湯川に入っていくと、面白いように泥鰌が捕れ、夢中になって時間を過ごしました。

その後、新潟へ転勤になり信濃川の近くに住みました。万代橋から川をのぞいても水の動きはなく、大河川の河口部の風景を初めて体験しました。

東京勤務を経て、名古屋に転勤となりました。名古屋市内には堀川が流れていました。名古屋の人々はこの汚い堀川を嫌い、足早に渡っていました。しかし、堀川は私に横浜の大岡川を思い出させてくれました。飲み会の帰りには、ネオンがキラキラ映る川面を橋の上から眺めて酔いを醒ました。

その後、米国ルイジアナ州のニューオーリンズに単身赴任となりました。ニューオーリンズはミシシッピ川のデルタにあり、川幅はせいぜい500m程でしたが、水深は50m以上もありました。川なのに軍艦や大型船がゆうゆうと行き来していました。

帰国すると神奈川県宮ヶ瀬ダムの勤務となりました。私が中学・高校でハイキングに行っていた中津川溪谷を水没させることになったのです。5年近く宮ヶ瀬ダムで勤務しました。今では大きな宮ヶ瀬湖が姿を見せています。

その後、広島に転勤になり、太田川のほとりに住みました。中国山地から流れ下ってきた太田川が広島市内で何本にも分かれて瀬戸内海に注いでいました。毎日の朝夕、太田川の堤防を歩いて通勤しました。

広島から東京勤務を経て、家族を残し再び名古屋へ単身赴任となりました。毎日のように長良川へ通う日々となり、夕方、疲れ果てて車に身をゆだねて見た長良川の夕陽は今でも目に焼きついています。

大阪の勤務となり阿倍野に住むことになりました。休日のたびに大阪の街を歩き回り、夕方になると道頓堀近くの食堂で晩酌をして宿舎に帰りました。

50歳を過ぎ、品川区大井町のマンションを終の住み家としました。

東京に落ち着いたとき、横浜の市民活動グループに呼ばれました。その集会では、横浜市内の川の魚の生態や、子供たちの川の環境学習活動などが発表されていました。

私は最初、大岡川のことだとは思いませんでした。あの臭くて、汚い川に、魚がいるわけがない。あの大岡川で、子供たちが環境活動をするわけがない。そう思い込んでいました。しかし、どうやらその川は、あの大岡川だったのです。

あの泥の大岡川はとっくに改善されていたのです。岸辺の護岸も改良され、市民の憩いの川になっていたのです。

私は自分の思い出の泥の大岡川を失いました。幼いころの思い出を失いましたが、全国各地の川の思い出を得ました。

今は、時間があれば近くの旧東海道を散歩しています。旧東海道を流れる目黒川や立会川が私の水辺となりました。江戸時代から数知れない多くの日本人がこの東海道を歩き、川辺でたたずみ、川面を眺め、去って逝っていきました。

私は過去から未来へ流れてゆく日本人の1人となり、この東海道の川面を眺めています。

これが私の人生の街と水辺の旅でした。